

## 創作ゼミより

宮内 麻友子 片桐 麻美  
宮田 知世 姫野 桂

まえがきにかえて

この度、創作ゼミは久しぶりにこのような場で書くことになりました。「創作ゼミ」と言ったら、創作しかない！ということではゼミ員4人によるテーマ創作をしました。テーマは「動物」です。それでは皆さま、楽しんでいただければ幸いです。

### 塀の上の猫

宮内 麻友子

ひと雨ごとに寒さが増してゆく十一月の街で、ゆいは十字路の角にある塀に立ち、眼前に伸びている通りを見つめていた。湿った鼻先が晩秋の冷たい風に晒されて寒い。

見上げた空は突き抜けていく青、白の絵の具をあまりつけずにおおぶりの刷毛で無造作に描いたような、透き通った太い雲の筋が一本走っている。猫が顔を洗っている様子で天気がわかるという人もいるが、ゆいにはそんな能力などないらしい。雲の形を見ても何もわからない。

「きつと飼い馴らされた猫だから」

心の中でひとりごちる。見る人がゆいの血統書を見れば、いい猫ちゃんなのねえと言うだろう。生まれ落ちたその時から、彼女は大切にかしづかれる運命を負ってきた。人と暮らすために子猫の時から彼らの目に晒されているゆいに、目を留め、生活をともにすると決めてくれた人間には恵まれたと思う。野生に憧れ、飼い馴らされる現状に密かに反抗していたのも昔のこと。保護者である彼らは、さわの生活を支え、可愛がってくれるし、彼女を必要としているらしい。依存することをやめれば、飼い馴らされるのも悪いことではない。飼われることを愛情とし、その愛情は基盤と捉え、ゆいはみずからの感情に従って選択をするようになった。その時からこの雌猫は、野生ではないながらも、みずからを縛っていたものから自由になったのだ。

塀に腰を下ろして道を眺めていると、視線の先をよく横切る一匹の雄猫がいる。時間帯はまちまちだ。きつとそこを通って自分のお気に入り場所へ行くのだろう。見つめるゆいの心は、ある時ときめき、またある時悲しく、痛んだこともあって、いま懐かしく優しい。

かの猫の歩いていく後を最後まで追うこともなく、ゆいは遠くまで見通せる道の彼方を丸い目で見つめた。

ふと目を上げると、空は抜けるように青い。青のキャンパスに刷毛で

軽やかに乗せられた白はアクセントの記号に似ていた。

風が吹けば外気は冷たい。ゆいは身をぶるると震わせると、塀を蹴り音もなく地面に降り立った。家に帰れば温かい部屋とごはんが待っているだろう。

ゆいは飼い猫。いま一匹で生きていく術を知らない。それでも、一匹で生きていくわけではないことを知っている。受け入れればそこに温かい愛情があることの、喜びに気づいている。首を動かすたびに鈴がりと鳴る。嬉しく思うようになったのは、最近のことだった。

## 八月

片桐麻美

一本バスを逃した。

十二月にしては暖かな空気が不快だった。風が恐ろしく強い。頭のずっと上で鳴っている。

時計を見ると六時を少し回っていた。

傘を差すには及ばない程度の雨が降っている。風が強いので小さな雨粒は舞い上がってさほど気にならないし、こんな風では傘はそもそも役に立たない。空は厚い雲が覆っていて、それが尋常でない速さで流れている。流れるけれども隙間ないので、その向こうは見えない。地上の光を雲が反射しているばかりなので、いつもの、まだ明け切らないでいる空よりも明るかった。但し『明るい』という言葉は否定的に働いている。

やっときたバスに乗り込むと、思いの他混んでいてうんざりした。休日の、この時間帯のバスが何故こんなに混むのだろう。皆が皆マスクをしていて、狐か何か、別の生き物に囲まれている気分だった。立体マスクは人間にはファッショナブルすぎはしないだろうか。あれは犬とか狐とか、猫もキュートかもしれない、が似合うんだ。

そんなことを考えているうちに、どんどん混んでくる。冬着が、それ以上にマスクが暑苦しかった。いっそ夏ならよかったのに。夏の暑苦しさなら耐えられるよ。

暑苦しいバスの中から外を見ると、タチアオイが咲いていた。次の瞬間、その鉢植えは風に倒れた。

バスは走っているのに、立ち止まりはしなかった。

## 籠の中の鳥

宮田知世

窓を開けたくなくて

窓を開けた

8月末

夏の終わりの霧雨

深呼吸しなくなつて

深呼吸した

晴れた日が好きなのに

雨の匂いが

心地良かった

籠の中の鳥みたいに

遠い地に想いを馳せて

果てのない空を見遣る

自分の無力さを思い知ったとき

人は

比べものにならない程

大きなモノに

身を委ねたくなるのかな

自分の弱い心が

頭と体をバラバラにする

より高く空を飛ぶ

その翼を手に入れるために

すすんで籠の中に入ったはずなのに

なかなか手に入らなくて

もう空に望郷

ゆうき

宮田知世

有木

たたずむ木は

もう葉のない枝を揺らす

夕鬼

オレンジ色は

ぶちまけた黒に飲まれ

コートなしで歩く私に

凍み込んでゆく秋風

憂季

肩をさするあなた

この手を包み込むあなた

目を閉じなくては

現れないYOU

誘棄

どんな言葉も

あなたほど深く

もう届くことなどないのに

優祈

四角いものを丸と見て  
固いものを柔らかく  
全てを受け入れるのだと  
言い聞かせて

## 晩秋

宮田知世

神無月の初めに

君のことが頭から離れなくなった  
ほんとに不意打ちで

今まで忘れていた

波打つ心の音を聴いて

些細なことに一喜一憂していた  
だから

日に日に寒くなっていく

この街の空気も

感じるものが出来なかった  
でも

晩秋は忍び寄ってきてた

想いが自分の中で先走って

君と登るべき山に

私の心は一人で登ってしまつて

だから振り返っても  
君がいるわけなくて  
ふと坎じる切なさに負けて  
ため息ついて山を下る  
もう山なんか登らないって  
耳を塞いで  
目を閉じて  
美しい紅葉も見ずに

## 煙の痛み

宮田知世

最近何をするにも

やる気がおきなくて

煙のようなココロが

あてもなくさまよう

そう クウキヨ

空虚なくせにココロは

鉄の処女に抱かれて

何度も血を流す

何もないはずなのに

なんでこんなに痛むんだろう

## 雌猫の行方

姫野 桂

例えば私が醜く汚い野良猫だったとしたらきつと美羽は猫缶やカリカリのキャットフードを与え、頭をなでようとそつと手を伸ばすだろう。

猫はびくつとして耳を伏せ嫌悪感を体全体で表し、咀嚼を続けながら上目遣いで彼女を見上げるに違いない。そして自分に害を及ぼさないと分かる、再び生臭い餌に顔をうずめるだろう。私は彼女の猫になりたかった。血統書付きのロシアンブルーやアメリカンショートヘアなんかじゃなくて、毛並みの悪い黒とか茶とか焦げ茶色とか、とにかくいろんな色が混合したぼさぼさの猫でいい。ついでに目や二なんかも出ていると最高だ。いつか美羽の長い奇麗な黒髪に触れ、身体の曲線をなぞり、漆黒の瞳に自分の姿だけを映して欲しい。願わくば私にだけ餌を与えて欲しい。

日はとつくに登り、柔らかな冬の日差しがブラインドのすき間から真つすぐに差し込んでいる。シーツを掴む。布のこすれ合う音。ポチの香りは染み付いているが姿はない。ああ、そうだ、今日は一限からだつて言つてたつて。ポチ―橋田寛太―とは付き合つて二年になる。ちゃんとした背筋とか回転の良い頭とか引き締まつた口元とか、なんとなく犬っぽい。それだからポチ。彼の目は人を疑う事を知らない。そして今彼にとつて私だけがご主人様なのであろう。私はのろのろと起き上がりブラインドを上げた。相変わらず黒く濁つた水の川が流れている。

「汚いな」

なんともなしに呟いた。私の声は軽く散らかったポチの部屋にこだました。外の風景を一通り眺めた後、熱いアールグレイをいれた。今日は

五限に一コマしか講義を入れていない。これを飲んだらシャワーを浴びて化粧をして一度自分の部屋に帰ろう。

「私ね、親友の事がものすごく好きなの」

午後七時半。私はワインのグラスを傾け、揺れる深紅の液体を眺めながら言った。店内にはジャズピアノの生演奏が流れている。

「それはとても良い事じゃないか」

そう言つて男はメガネの奥の目を細め、牛ヒレステーキを口に放り込んだ。自称IT企業の課長、大原さん。年は四十代後半だろうか。でっぴりとお腹が出ている。こうやって男性と食事したり呑んだりする事が私のアルバイト。今日の日給はいくらだろう。こいつと前回食事をした時は一万だった。今日はお酒も入っているし、もう少し多めに見積もつてもいいだろう。

「彼氏よりも親友の事が好きなの」

そう言つたら大原さんはガハハと笑つた。唾が飛んだ。

「汚いな」

私は小さく呟いた。大原さんには聞こえていないらしく、レアの血が滴る生肉ががついている。

このバイトは三ヶ月前にフリーペーパーに載つていたアルバイト募集の広告ページで知つた。トークレディーと呼ばれる仕事である。『時給約四千元』という文字に飛びついて登録した。表向きの看板には『コミュニティカフェ』と黒地にピンクの丸文字で書かれている。男性は登録料金がかかるが女性は無料。要するに会員男性とおしゃべりをし、デートをするとそのお礼として男性がくれたお金がそのまま給料になるのである。店長は

「うちはキャバクラでも風俗でもない。ちゃんと保健所に届け出を出し

ているし、もちろん法には触れていない」と言った。おそらく法のギリギリをすり抜けているのであろう。はつきり言っておヤジと食べる飯は美味しくない。だから私はいつも美羽の事を考えていた。

駅までの道のり。大原さんはワインでかすかに頬を赤らめ、私の腰に手を回そうとする。オヤジに触られるくらいなら死にたいので私はうまくそれをかわす。

「これから親友の家に行くの」  
私はまた美羽の事を口にした。

「そうか、仲良しなんだね」  
かわされた腕を不満気に弄んでいる。

「そうなの。一緒にお風呂に入って一緒にベッドで眠るの。朝ご飯も二人で作って食べるんだよ」

「羨ましいな。僕なんて朝は家族みんな寝ているから会社でコンビニのおにぎりとか缶コーヒードよ」

大原さんは悲しそうに笑った。どうでもいい。改札の前で給料を握らせてくれた。一万三千円。期待していたより少ない。それでも私はにっこりと微笑んで改札口を通り、もう一度振り返って手を降った。汚い。私はこれから美羽の家になんか行くわけがない。行ったらきつとびつくりする。蹴ったら折れそうな美羽に私の気持ちなんて重過ぎる。会いたいよ。でも明日の二限は同じ講義を取っているから会える。いつもの席に二人でお行儀よく座って時々美羽の横顔を見ながら静かにノートを取るの。その後は一緒に学食で日替わりランチを食べたい。美羽は世界で一番美しい。でも今すぐには会えないからポチの部屋に行く。

駅からポチの部屋まで十五分程歩く。公園のベンチにはお互いの腕を首に回し、今にも何かが始まりそうなカップル。その前を瘦せた猫が

しゅるしゅると走っていった。

部屋のベルを鳴らすとポチは首にタオルをかけ、お風呂上がりの火照った顔を緩ませながらドアを開けた。昼間と変わらず落ち着く程度に散らかっている。冷蔵庫から缶ビールを取り出してソファに腰掛け、なんとなく二人で乾杯。

「ポチの親友は金子君なの？」  
「やだなあ、親友とかいう言葉、照れるよ。でもまあ、そういう事になるのかな」

「そう。私ね、ここに来る途中に猫を見たの」  
「最近この近くは野良猫多いからな」

「痩せつばちで目が光ってた。その猫になって美羽に会いに行きたいと思った」

「ほお、また君の不思議ちゃんぶりが始まったね」

ポチは苦笑して私の頭に手を伸ばし、髪に触れようとした。しかしその瞬間、さっきオヤジに腕を回されそうになった時みたいな酷い不快感が頭からつま先までを駆け巡り、気付いたらポチの手をはたいていた。あまりの出来事に目を丸くするポチ。数秒後には悲しさが溢れた瞳で私を見ていた。私は泣いた。何度もごめんなさいと言い、今度はポチの大きな腕を拒まずに腕の中に収まった。

「私は美羽の事が大好きなの」

声にならない声で言った。ポチはうなずく。

「私は美羽の猫になりたいの」

ポチはぐしゅぐしゅ泣く私をバスルームへ連れていった。服を脱がして自分のズボンとトレーナーの袖をまくり。私をお風呂の椅子に座らせ背中を流してくれた。桃のボディソープの香り。泡が私を包む。猫は

お風呂が嫌いなんだよ。早くここから出して。そして美羽が眠るふかふかのお布団で私も一緒に眠らせて。大原さんもポチも同じ雄という種類で美羽と私は雌。ただそれだけが憎かった。ただそれだけが愛しかった。

「明日は美羽と同じ講義があるの。だからサボらずにちゃんと大学に行くの」

ポチは何も言わなかった。よく泡立ったスポンジで優しく私の背中を擦っていた。なんだか悲しくなって目を閉じたら、黒猫が見えた。

「汚いな」

そう呟いたら涙が止まった。もう何も悲しくはなかった。